「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

編集後記

森や自然を教育の場として活用することは決して新しい試みではありませんが、自然の中での教育の重要性が国際的にも認められる中、十分な広がりを見せているようには思えない現状があります。

以前、「自然の中で遊ぶことが幼児の脳の発達には大変適している」という話を、高名な脳科学者から聞きました。不規則な地面や木々はどんな環境にも対応できるフィジカルを発達させ、生き物たちが織りなす無限の多様性は好奇心や問題解決能力など人生に必要なメンタルを育てるというのです。私自身も環境教育に携わる中で、自然の中でどんなに子どもたちが生き生きと動き、成長するのかを目の当たりにしてきましたし、自分自身が森や自然から受け取った学びの多さは計り知れません。

だから、森に子どもの足が向かない、というのは少し残念だしもったいないとも思うのです。そして、改めて北海道という森林大国は、人を育てる大きなポテンシャルがある。もっとたくさんの子どもが遊びに来ることができるような森づくりが増えたら素敵だろうな、と、はじけるような笑顔で魚捕りをする子どもたちを眺めながら思ったのでした。

https://www.facebook.com/coop.asumori

モリイク vol.15
2018年4月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金

VEGETABLE OIL INK R100 この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクおよび100%再生紙を使用して作成しています。

コープ未来（あした）の森づくり基金レポート

モリイク
MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.15
Apr. 2018

つなぐ COOP SAPPORO

北海道のあしたの森を育てる コープ未来（あした）の森づくり基金

コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

モリ*イク

人生で必要なことは
全て森から教わった。

* contents *

コラム　森づくりのトレンド　*02
未来のための市民による森づくり

特集　森のようちえん　*04
森と川で育て、子どもたち。

木のおもちゃが育てる心　*08
おもちゃの森 sapporo*

もっと樹のことを語ろう　*09
大きな木の小さな物語

親子で楽しむ森のページ　*10
森のキモイ・キレイ

木育 essay　*12
やさしい男たちの椅子

コープ未来の森づくり基金報告　*13
第 3 回コープの森育樹祭　など

Starting Column
森づくりのトレンド

未来(あした)のための市民による森づくり

最近、森のようちえんなど、小さな子どもたちを自然の中で育てる取り組みが広まってきています。以前から地域の自然保全や教育に関わる団体が子どもたちへの体験イベントを単発的に行ってきていましたが、森のようちえんの活動は理念や目指すことをはっきりとさせ、日常的な子どもと自然とのかかわりをつくろうとしている点で、新しい活動といえます。

森のようちえんは全国ネットワークもあり、そこで共通する基本として設定されているのは、自然の中で子ども・親・保育者が共に育ちあうこと、自然の営みに合わせること、いっぱい遊ぶことです。そしてこれを通して、自然の中で仲間と遊び心と体のバランスのとれた発達を促す、自然を感じ、自然の中でたくさんの不思議と出会い豊かな感性を育む、子ども自身で考え行動できる雰囲気をつくることを目指そうとしています。

小中高校などで取り組まれている、環境課題を解決することを最終的な目標においた環境教育とは異なり、子どもたちが自然と向き合い、自然の中で遊ぶことを通して、感性と自立をはぐくむことを目指しているといえます。

森のようちえんは1950年代以降デンマークやドイツで始まり、自然の中で子どもを育てたいという母親たちの活動から広がっていったといわれています。実は同じような考え方は日本にも大正時代ころからあったようで「林間保育」といった取り組みが散見されます。

こうした活動は当然ながら大人が始めるわけですが、そこには私たちの持つ危機意識があると思います。自分がかつて持っていた自然との付き合いが今の子どもたちにはない、子どもたちの自然との関係が希薄化しているという危機意識です。そしてもう一つ指摘できるのは私たちが持つ自然への畏敬というのでしょうか、自然そのものが教育力を持っており、これに委ねることで子どもが発達していくという思いです。自然なしには生きてはいけないが、日々の生活が自然から切り離されている中で、自然とのつながりを取り戻し、維持していくことを次の世代に伝えていきたいという私たちの本能の発露なのかもしれません。

ただ、こうした思いは別として、子どもたちが楽しく遊び、それを親や保育者が楽しく共有するという時間と空間の存在することが一番大事なのだと思います。

一方、子どもを対象とした自然体験活動をしている方々からよく伺うのは、参加するのは小学校くらいまでで、その上になると部活や友人との活動でつながりが切れてしまうということです。そんな中、例えば下川町では「NPO森の生活」が幼稚園から高校まで一貫した森林体験・環境教育のプログラムを提供しています。こうした仕組みは小さい町だからできる取り組みかもしれませんが、小さな子どもに芽生えた自然とのつながりを何らかの形でその後も育てていければと思います。

柿澤　宏昭
(かきざわ　ひろあき)

北海道大学
森林政策学研究室 教授

コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。

森と川で育て、子どもたち。

美しく豊かな自然の中で
のびのびと遊ぶ子どもたちに
思いを託す。

森と川のようちえんコロポックル

標津郡標津町字川北228-1　0153-85-2114

森のようちえんは今、注目の育児スタイル

現代の子どもたちはとにかく自然とふれあい、感性を育てる機会が少ない。そのことを心配して、自然の中で子育てをしようと、日本でもここ10年ほど活動が盛んになってきたのが「森のようちえん」です。

もともと北欧ではじまった森のようちえんは、その斬新なスタイルから日本の環境教育や自然体験活動を実践する人や、子育て中のお母さん方からも注目され、近年では全国各地で自主保育を中心に森のようちえんを行うグループも増えてきました。また、その教育効果に注目して活動を支援する自治体も出てきています。

そう。森のようちえんは、これから注目される育児のスタイルなのです。

森のようちえんの子は自然の中で元気いっぱい

北海道の東の果て、標津町は豊かな川と海、原生に近い森、美しい景観に包まれた町です。その中で「森と川のようちえんコロポックル」を運営するのは水口さんご夫妻。朝の気温が−20℃にもなろうかというこの日も、胴長靴をつけた子どもたちと元気に川に遊びに出かけます。ちなみに毎月のように行っているこの川遊びはもう10年続けているとのこと。

さて、道中の植物や鳥を観察したり、雪玉を投げ合ったりの後にたどり着いた川に入っていく子どもたち。ほとんどの子は躊躇もなく、砂場や公園の遊具で遊ぶみたいに自然に川に降りて慣れた動きで魚を捕りはじめました。極寒の空気の中、冬の川でこんな風に動ける子どもって、そうはいないのではないでしょうか。「あっ！ヤマメ入った！」「ウキちゃんいたよ」ウキちゃんとはハゼの仲間のウキゴリのこと。ほかにも、トミヨやウグイを声を上げながら、あっというまにバケツにひしめき合うほど捕まえました。

この後は、川に張った氷に乗ったり滑ったりしながら夢中で遊びました。手袋が濡れるのはもうおかまいなし。でもいくらバランスを崩しても転んで川に転落する子はいません。滑って転びかけても、姿勢を立て直すのです。

こんなふうに川で遊んだり生き物を探したりお弁当を食べたりして一日を過ごす子どもたち。楽しくて寒さを感じる暇もありません。

森のようちえんで大切なこと、思いっきり遊ぶこと

まるで子どもと自然が溶け合ったような風景。その理由のひとつは、子どもたちの遊びをいくらでも引き出す豊かで美しい自然なのでしょう。たくさんの楽しい環境があり、網を入れれば魚やザリガニがいる豊かな川があり、見渡せば広がる原野と絶景です。そしてもうひとつは、ほとんどの子どもが遊びなれたリピーターであること。こんな遊びを数回繰り返せば、みんな自然の中を自在に動き回ることができる、その適応力はやっぱり子どもならではです。

思う存分遊んだ子どもたちは満足な笑顔を浮かべてめいめい帰って行きます。そこには学習や教育的な要素はほとんど見当たりません。地元の自然で思いっきり遊ぶ。生命に触れ合う。そして疲れて帰る。こんなに闊達で物怖じせずに自然に向かっていく子どもたちってすごい。こうして自分たちの住む地域の自然の中で遊び、体験を積み上げることこそが、子どもたちにとって大切、と水口さんはいいます。

そんな水口さんご夫妻の野外で子どもを育てることへの思いって、どんなものなのでしょう。

自然の中で子育てしたい！

「自然の中で子育てをしたい」とは、水口さんご夫妻に子どもができたときに思ったこと。草刈機の使い方もわからない素人だけど、まずはその場を準備しようと標津町の原野に土地を購入。家も建てて、素人なりに工夫して生活の場づくりをしているうちに、自然に子どもが育っていくことに気づいた。何もないようだけど「必要なものはなんでもあるじゃん、って思ったの」と、妻の郁恵さんは話します。

そうこうしているうちに自然の中で子育てしたいというママ友から「うちの子にも自然体験させたい」と相談されるようになり、「それならうちに来なよ」となったのがきっかけで、森のようちえんの形が始まったのだそうです。

自分の居場所も遊びも、自然の中にあるよ。

ただ、水口さんは自分が森を整備して待っているわけではなく、例えば子どもに薪割りをしてもらったり、知り合いの漁師さんや大工さんにハンモックを張ってもらったりツリーハウスを作ってもらったりしているそうで、つまり手伝ってもらって場を作っています。人を上手に巻き込む事で、周囲の人が「次何をやろうか」と自然と場を広げて行ってくれるという、参加型のスタイルなのです。

では、子どもにはどんな遊びを提供しているかというと、何か特別に用意しているわけではないようです。子どもたちはハンモックや薪割り、スラックライン、虫捕りなど、好きなように遊ぶのだそう。「遊びを見つけるのは子どもの方が得意ですからね」と、「子どもが伸びたいように伸びる場」というコンセプトで遊びをつくる面白さや考える余地を残した環境設定をしているのだとか。

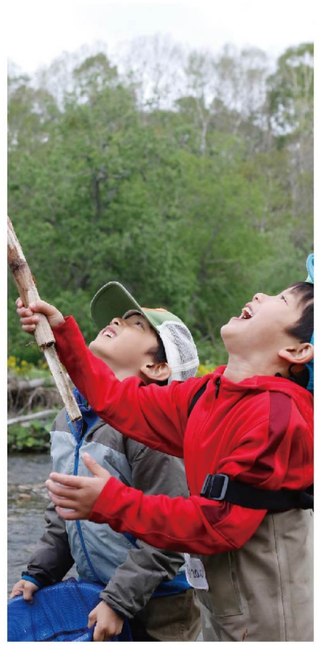
そんな場で遊び、育った子はどんな風に育つのでしょう。「まず、体が丈夫ですね。怪我をしないし風邪をひかない」とは、ご自身の二人のお子さんについて見てきたこと。自然の中にどっぷり浸かって育った一番身近なケースというわけです。「あとは、きれいなものを素直にきれいと感じる感性は育ったかな。集中力があって、好きな事はずっとやっている。それから、自分のフィルターを通して考えてものをいえるというのはあるんじゃないかな」と、夫の拓真さん。周りの人の考えを鵜呑みにせず、自分で考えてものを判断している、ということ。

言葉にできなくても「いいよね」という体験を積み重ねて

冷静に自分の子どもについて観察していますが、実はお二人は学校の教員でもあります。多くの子どもを見ている中で、自然とのふれあいの多い子について、学校教育というものを加味しながら比較検討できるのです。

「学校教育では感動したこととか、文字化させる傾向があるんです。『なんだかうまく表現できないけどいい』っていうこともあるじゃないですか」「学校では冬休みに“雪遊びチェック”があるんです。好きなことだから遊ぶのに、遊びを強要されちゃう」とお二人がいうように、学校教育が本来の「人を育てる」ということについて難しい局面に立たされているという現実もあります。そんな風に、公的な教育機関では届かないようなところにも人が育つための大切な基礎があるのだと考えるのが水口さん。「いいものを見ていると、悪いものがわかる。逆はないんです」とは、良い体験を積み重ねることで何が良いのか、何が悪いのかを直観的に判断する力を養うということ。だから、「文字化できなくてもいい、具体化できなくてもいい。“何かわからないけど好きなんだよね”“うまくいえないけど、いいよね”という体験をたくさん積んでほしい。それが幼児教育では一番大事なことだと思う」といいます。つまり、体験がなければいくら文字化してもその言葉はニセモノになってしまう。豊かな体験は言葉と考えを本物にする。だから、「つめたい、きれい、おいしい。人間としてできていく感覚を積み上げていく。原体験の場であることが一番大事」なのだと、自分たちの活動への思いを語ってくれました。

遊びたいように遊ぶ。伸びたいように伸びる。与えられるのは最小限、自分で生み出す遊びは無限大。



河川の生物調査に関わった経験もあり、熟知している周囲の川はメインの活動の場となっている。子どもたちは川の生き物に触れるのが大好き。魚の種類や個体の増減など、環境の変化などは学習するよりも「体感」できる。
自宅周辺は水口さん所有の原野で、「きつつきの森」と名付けられ、森のようちえんなど、イベントや子育ての場として解放している。ハンモックやツリーハウスなど、子どもが遊べる施設は周囲の人が手を貸して作ってくれたもの。今度は五右衛門風呂を設置予定と、水口郁恵さん・拓真さんご夫妻と２人の子どもたち。

未来への種を播くという役割

活動を続けることについて、拓真さんは「良質な体験を積み重ねることは環境保護にもつながるだろう」といいます。「ふるさとの川でいっぱい遊んだ子どもは川がなくなってしまうとなったときに考えることができるでしょう。遊んでないと関心自体が生まれない」。なるほど、ふるさとでの楽しい思い出は環境への思いの出発点になるのかもしれませんね。

そしてそれがふるさとを自慢に思い、大切にすることへもつながるだろうと話します。「ふるさとを誇りに思えるって、自己肯定感にもつながると思うんだよね」と郁恵さん。ありのままの自分を受け入れる“自己肯定感”が育ちにくい現代社会で、こうした外遊びにも解決のヒントがあるのかもしれません。

「楽しいことって人に伝えたくなる。家族ができたら子どもにも伝えたい。その伝承が文化なんだと思います。楽しいとか素敵だとか、自分の心に堆積した感覚や体験をほかの人に伝えられる。そういう人が増えて外遊びが文化になるといい。ふるさとへの見方も自分への見方も変わる。そうすると、きっと社会も変わるんじゃないかな」。と、未来への希望を語りますが、一方で「私たちの役目は種を播くこと」だといいます。どんな芽が出るのか見届けられないけど、子どもたちの心に体験の種を播きつづける。きっとそこから出た芽は強く優しく生きる心を育むのです。

自分が楽しむこと。その向こうに未来がある。

日本では多くの森のようちえんが自主保育で運営されていて、その課題と指摘されているのが継続性です。例えば、自分の子が小学校に上がって子育てが一段落してしまうとお母さんの関心やモチベーションも低下して運営が続かなくなってしまう。そうしたことが原因で自主保育は長続きしにくいといわれているのですが、二児の母でもある郁恵さんは「“ようちえん”って呼ぶから期間限定になっちゃうんだと思うよ。私たちはこれからもずっと森や川で遊びたいし、それを伝えていきたい。自分たちが楽しむことが大切なんじゃないかな」と、続けていくことに悩みはないといいます。

しかし、課題もあります。それは時間。お二人は教員でもあるので、学校の仕事との両立はとてもしんどいのだとか。それでも、「学校でできないことをふるさとの子どもたちのためにやっていきたい」「今も試行錯誤だけど、きっといい社会へと導くものは自然の中にある。それは間違いない。だから、ずっと続けたいと思っています」。と、今後どのようにしていくのか考えつつも、継続していくのだという決意を話してくれました。

自然が人を育てるその力を信じて体験という種を播き続ける。子どもたちの未来とふるさとの自然、何より自分たちが楽しむために。水口さんご夫妻が育てる森のようちえん。それは、飾らないけど豊かで奥深い、まるで標津の原生林のような場所なのでした。

OMOCHA NO MORI
SAPPORO*
http://www.omochanomori.jp/

さまざまな形、さまざまな手触り、さまざまな音…。木のおもちゃは見て、触って、聞いて、動かして、どこから見ても楽しめるもの。大人だって楽しいのだから、子どもはもっと楽しいに違いありません。

木のおもちゃを専門にしたインターネット通信販売のお店があるのをご存知ですか？ その名も「おもちゃの森sapporo*」。営んでいるのは、杉浦さんご夫婦。夫の勝彦さんは、お子さんが生まれるのを機に、家族と一緒にいる時間や子育てを共有し、成長を見守りたいと働き方を考え直し、勤めていた会社を退職。次の仕事を考えていた時に妻の彩さんが提案したのが木のおもちゃの販売でした。「子育てサロンに行っていた時、木のおもちゃがいっぱいあって、子どもがずっと遊んでいたんです。それから、漠然と木のおもちゃっていいな、と感じていました」。新しいことに不安もあったけど、これなら一緒にできると思ったといいます。そこからおもちゃや遊びに関する勉強や資格の取得など、準備を重ねての開業でした。おもちゃについて本格的に学んだから、ラインナップも、「ただかわいいだけ」でなく、楽しく、成長につながるおもちゃとはどういうものなのかを十分に吟味しています。

そんな木のおもちゃの魅力について、「プラスチックと比べると人の肌に似ていて安心感があるといいます」と彩さん。安心と安全は何をおいてももちろん最優先。勝彦さんは、「シンプルなものが多い、というかそういうものしか作れないんですが、子どもは遊びの天才です。想像を膨らませながらいつまででも遊べるのが木のおもちゃの魅力です」。作り込まれていないからこそ、想像力が無限に広がると話します。

おもちゃの森sapporo*のチョイスは、ヨーロッパのメーカーよりも比較的リーズナブルな国産のものを豊富にそろえているのも特徴。それは、できるだけ多くの人にお手頃によいおもちゃを使ってほしいという思いと、日本のおもちゃ作家を応援したいという理由から。日本のおもちゃ作家は経営状態がいい所は多くない。それは、子どもが使う木のおもちゃはシンプルな形と裏腹に形状や仕上げに気を使い、手間がかかるから。それでも作り続けている作家さんたちを応援したいし、ひいてはそれが森を守ることにもつながるといいます。

ところで、全国で木のおもちゃの購入が多い地域は東京や神奈川などの首都圏なのだそうです。北海道にはまだまだ木のおもちゃで遊ぶ子どもは少ない様子。杉浦さんは、木育広場や子育てサロンなどでも木のおもちゃを持ち込んで、その良さを広く伝えています。「木のおもちゃで遊んで育つことで、想像力やコミュニケーションの豊かな大人になってほしい。そうすれば、北海道や日本、そして世界の森や、気候変動のことにも関心が持てる。関心がないと森なんてどんどんなくなってしまいます」と勝彦さん。北海道の子どもたちが木のおもちゃに囲まれて育ち、北海道の森を大切にして、地球の裏側のできごとにも関心を持つ大人になる。きっと、そんな“人づくり”をすることも木のおもちゃの役割なのです。

いろんな形や音や手触り。五感を刺激して木のおもちゃが育む想像力。それは私たちの未来を育む力なのかもしれません。

おもちゃの森sapporo*を運営する杉浦勝彦さん（右）と彩さん（左）。木のおもちゃで遊び、育つことで、たくさんの子どもたちがコミュニケーションと想像力の豊かな大人に成長してほしいと願う。ともにおもちゃコンサルタント・おもちゃインストラクター。北海道出身。

※おもちゃの森sapporo*のウェブサイトはこちらからも。また、通販で人気の大人も子どもも楽しめるおもちゃを読者プレゼントします。詳しくは15ページに。

大きな木の小さな物語
⑩ アキグミ

アキグミは高さ２～３mほどになる落葉広葉樹の低木です。北海道全体にあるわけではなく、日本海側から石狩低地帯、渡島半島から日高地方にかけての太平洋岸西部に分布します。海岸砂丘の裏などにも生育していますが、自生しているものにお目にかかる機会は少ないかもしれません。ただ、公園などによく植えられているので、秋に赤い実をつけている姿をご覧になっているのではないでしょうか。

その年に伸びた枝（1年生枝）や葉には「鱗状毛（りんじょうもう）」と呼ばれる毛が密生しています。葉の裏や葉柄も銀色の鱗状毛に覆われているので、ちょっと離れてみると全体に白っぽく見えます。

秋になって色づく赤い実。これは名前の由来にもなっています。秋に実をつける「グミ」だからアキグミ。夏に実をつける「グミ」でナツグミという種類もあります。

ところで、実を取ろうとして痛い思いをしたことはありませんか？ 枝と枝の間に手を突っ込むとトゲに邪魔されます。これは２年目以降に、脇に伸びる枝が大きく伸びず、短いままトゲになってしまったものなのです。このトゲがグミの語源です。グミは「グイミ」の転訛といわれています。グイとは刺（とげ）のことを指し、元々はグイミ、つまり「刺のある実」だったということになります。

果実（実）は液果（または漿果（しょうか））といってタネの周りは水っぽい液体で覆われています。お菓子の「グミ」のようで、一見とてもおいしそうです。毒ではないので、幼稚園の子どもたちに口に含んでもらったことがありました。「苦～い!!!」。実（じつ）は「渋いっ！」という反応を期待していたのですが…。一般的に甘味、酸味、塩味、苦味、うま味の5つが基本味だといわれているので、渋味はまだ子どもたちの語彙の中に入っていなかったのかもしれません。渋柿やクリの渋皮などを口にすることもないので、案外渋味ってわからないかもしれませんね。この秋、どこかで見つけたらちょっとお試しください。

text/images 孫田 敏
‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士（建設部門：建設環境）。‘00年から北の里山の会代表。 著書：アトリウムと植生（積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計：絵内正道編著）、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方（水辺域管理－その理論・技術と実践－；砂防学会編）、森林管理と市民参加（北のランドスケープ 保全と創造 ：浅川昭一郎編著）
WEBサイト「Scan Botanica」 http://scanbotanica00.sblo.jp

参考文献
佐藤孝夫,2011,増補新版 北海道 樹木図鑑,345pp,亜璃西社　日野間彰, FLORA OF HOKKAIDO , http://www.hinoma.com/maps/index.shtml
牧野富太郎,1961,牧野新日本植物図鑑,1060pp,北隆館　上原敬二,1961,樹木大図説2,1203pp,有明書房
高槻成紀,1996,とげの収支決算,週刊朝日百科 植物の世界94,8-318～8-320,朝日新聞社　Wikipedia：味覚, https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%91%B3%E8%A6%9A

森のキモイキレイ

のぞいてみたら何かがいるよ。
ちょっとキモチわるい？
よく見るとおもしろい！
さがしてみよう、森のいきもの。
ほら、いのちのふしぎにあふれてる。

その11

森の中には動物や植物といっしょに
「菌類（きんるい）」が暮らしているよ。
その中でおなじみの菌はキノコの仲間。
よく見る傘のかたちだけが
キノコじゃないよ。
木の幹や地面をきょろきょろすると、
もっといろんな姿のキノコが見つかるかも？

森はキノコで回っている（まわ）

ニョキニョキはえているキノコには
森を作る大事な役割があります。
キノコは木々に栄養を与え、栄養をもらい、
命を終えた生き物をふたたび土にかえしています。
動物のご飯になるキノコもありますよ。

キノコの生き方3種類

森にキノコがいなければ、木や虫が増えすぎて生き物に栄養がまわらないし、枯れ木や死がいも土の栄養にならず、森が枯れてしまうかも。土の中、地面、木の上で生きているキノコのおかげで、森の命がめぐっています。

① 共生（きょうせい）

樹木と栄養のやり取りをする生き方。地面の中には大きな菌のコロニー（集団）があり、根っこの先端を包み込んでつながっています。キノコは地面の中から栄養を集めて樹木にあげて、樹木は葉っぱで作った栄養を根っこからキノコたちに分け与えています。病原菌から根っこを守ってあげてもいるよ。

② 寄生（きせい）

生き物から一方的に栄養をもらう生き方。キノコの寄生菌が樹木や虫（昆虫、クモなど）に入り込んで栄養を奪い、宿主となった生き物の多くは死んでしまいます。そう聞くととても怖い存在に思えるかな？ でもキノコが寄生することで、森の中では生き物の数が増えすぎないようにバランスが保たれています。寄生菌で有名なのは虫からキノコが生えた「冬虫夏草（とうちゅうかそう）」のグループ。漢方薬になる種類もあるんだよ。

③ 腐生（ふせい）

枯れ木や枯れ葉などを分解して栄養をとっている生き方。キノコが食べることで、枯れた植物は有機物から無機物にまで分解されて、次の植物の栄養となります。動物の死がいも分解するよ。命を終えた生き物を土に返す「森の掃除屋さん」。

毒キノコに気をつけて!!

間違えて食べてしまい中毒になるのが危険な毒キノコ。古くから言われている見分け方はほとんどがウソの迷信。虫が食べたあとがあるから大丈夫ということもありません。食べられるキノコ、危ないキノコは覚えるしかありません。特に、食べると命に関わる猛毒のキノコは、北海道ではそんなに数が多くないので、以下のキノコはしっかり覚えておきましょう。

猛毒 ドクツルタケ、タマゴタケモドキ、タマゴテングタケ、フクロツルタケ、カエンタケ、ニガクリタケ、シャグマアミガサタケなど。死に至る怖いキノコだよ。

毒 ツキヨタケ、クサウラベニタケ、カキシメジ、ベニテングタケ、テングタケなど。
ちなみに北海道におけるキノコ中毒件数ナンバー1はツキヨタケ。札幌市ではテングタケ。

札幌市のWebサイトに詳しく載っているので見てみましょう。
http://www.city.sapporo.jp/hokenjo/shoku/chudoku/dokukinoko.html

キノコは木の子 「木」からキノコを見つけよう

木といっしょに生きるキノコ。種類によって樹木の好みはいろいろです。町や公園、森や原っぱにどんな種類の木があるかわかると、どんなキノコがいるかわかるかも。

キノコはどこに生えている？

キノコの生き方に合わせた栄養源があるところを探そう。

- 共生のキノコを探すには、共生相手の樹木が育つ地面。カラマツやトドマツなどの針葉樹の近くにはハナイグチやタマゴタケ。シラカバやダケカンバの近くにはベニテングタケ。
- 寄生のキノコを探すには、寄生相手の昆虫がいるところ。セミタケはセミの幼虫がいそうな森の地面。ハチタケはスズメバチの新女王が越冬するトドマツ林の地面。
- 腐生のキノコを探すには、枯れ木や枯れ草のあるところ。ナラタケは森中どこでも。タモギタケはハルニレの倒木。ナメコはヤナギやシラカバの倒木に。

キノコ目になろう！

① ゆっくり歩いて、じっくり見る。
足を止めて動かずに探すと、だんだんキノコが見えてくる。

② 予習して準備しておこう。たくさん覚えて詳しくなると、一見キノコには見えない形の仲間も発見できるようになるよ。

図鑑（ずかん）と仲良くなってキノコを見分けよう

慣れるまではなかなか見分けられないキノコの仲間。その手助けをしてくれるのが図鑑です。図鑑やインターネットでいろいろな写真を見て予習ができたら、森でたくさん見て目を肥やそう。キノコは成長過程によってその姿がいちじるしく変わるので、一つの姿だけ覚えても見間違うかも。正しい知識と経験を持った人と一緒に森を歩きましょう。写真やスケッチで記録しておくと後から調べられるよ。

キノコは非常に種類が多く、北海道には少なくとも5000種類以上あるとされています。ちゃんと名前がついているキノコは現在2000種ほど。私がオススメする素晴らしい図鑑『北海道のキノコ』（五十嵐恒夫・著/北海道新聞社）でも掲載種は800種です。図鑑に出ていないキノコも野山には生えていますので、野生のキノコを食用として利用される場合にはご注意ください。
キノコが見られるのは秋だけではありません。早春から生えるキノコや真夏に生える種類も。同じ森でも行くたびに違う姿を見ることができます。そしてキノコは逃げません。近寄ってじっくり観察したり、写真を撮ってみましょう。特徴をしっかり覚えると、少しづつ森のキノコたちと仲良しになれるかも。キノコはまだまだわからないことの方が多い生き物です。ぜひみなさんも身近なフィールドでキノコに親しみ、不思議でかわいいキノコの奥深〜い世界に足を踏み入れてみてください。

お話を聞いた人

中嶋 潔（きよし）さん

「森林インストラクター」と「きのこアドバイザー」。得意分野は野生のキノコ。ニセコグラン・ヒラフスキー場の自然の魅力をお伝えする展示・自然ガイド施設「自然情報室エコル」を担当し、ガイドしています。（株）東急リゾートサービス勤務。大阪府出身。大谷大学文学部哲学科卒業。

morinoko

新岡薫／エトブン社
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかける。クモはちょっとコワい。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。
ブログ　http://etobunshainyezo.blogspot.com/

宮本尚／きたネット
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近はキノコのトリコです。北海道の森の歌を作りたいと思いつつ、なかなか時間がとれないのが悩みのタネ。今年こそ！
きたネット　http://kitanet.org

やさしい男たちの椅子

昔むかし。そう、今からちょうど50年くらい前のこと、森に一本の杉の木が植えられました。
杉の木は、日の光と土と降り注ぐ雨に育てられ、ゆっくりと大きくなっていきました。
まっすぐに空に向かって幹をのばし、緑の葉を茂らせる枝を伸ばし、地中に根を張っていくのは、とても楽しいことでした。
小鳥や動物たちが笑いながら通り過ぎ、森人たちがやって来て自分たちの手入れをしてくれたので、杉の木はいつも気持ち良くしていられました。
ところがある日、嵐がやって来ました。
強い風雨が吹き荒れ、森にある全てのものを吹き飛ばしていきました。
一緒に育ってきたきょうだいたちの中には、力尽きて倒れてしまうものもありました。
でも杉の木は、根をせいいっぱい踏ん張って、頑張りました。
大粒の雨が、つぶてのようにひゅんひゅん飛んできても、突風で一番太い枝を無理やりに折り取られてしまっても、杉の木はあきらめませんでした。
そうして幾度も苦難を乗り越えて、杉の木はりっぱな木に成長したのです。

三重県の美術館で知人の木工作家が、木の椅子の展示会に出品するというので、見せて頂くために出かけて行った。

意外にもそこで私たちが見たのは、真っ黒い目玉のような大きな節のある杉材で作られた一脚の椅子だった。

椅子のような家具を作る場合、杉のように傷付きやすく柔らかい木ではなく、もっと硬い材を使った方が良いのじゃないか。これだと使っているうちに、かき傷がいっぱいできて、せっかくの椅子がみっともない状態になってしまうかもしれない……。

「すわってみて」という言葉を受けておそるおそる腰掛けてみた。

何てこと！ あたたかいのだ。木の温もり、という言葉を日頃鼻で笑い飛ばしていた、ひねくれものの私に突き付けられた、おどろきの事実。

「やわらかいわ。まるでふわふわのクッションの上にすわっているみたい」

おずおずと言った私に集まっていた男たちがにっこりと微笑んだ。

「でしょう？ だから、杉はいいんだよ」

見回してみると、杉の椅子はほかにも出品されていた。ふわふわ感をさらに増す仕掛けの、はつり、という表面に凹凸のある処理を施したもの、食卓テーブルに据えられる目的で作られたものも……。

美しい姿を長く留める格調高い椅子よりも、自らの身に傷を受け止めながら、すわる者にやすらぎを与える椅子を作り出すことを選択した心やさしい男たちを、なんと賛美したら良いのだろう？

大きな節を隠すことなく、椅子の中心に据えたことも、作り手のやさしさだと思った。風雨に耐え、生き抜いて来た木の歴史そのものである傷を、尊いと思うからこその気づかいではないだろうか。

その木の魂の凝った、心臓とも言うべき節目を、私たちに見せてくれているような気がして、そっと指でなぞってみた。

はじめまして。
今回より、宮本尚さんからバトンを受け取ることになりました。私事で恐縮ですが、森に関わるようになった年数は10年足らずと浅く、少し不安です。幸い、尚さんを含めキラ星のごとく博識で魅力的な先生が、私にはたくさんいます。その方々に教えを乞いながら、楽しく皆さんと森の小道を散歩するように、すすめていきたいと思います。どうぞ、よろしく。

text / 齊藤 香里
介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに『ようてい木育倶楽部』を運営し、木育の活動を行っている。
介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Event Report

第3回 コープの森育樹祭

ゲリラ豪雨にだって負けない！ 秋の森を育樹で楽しみました。

第3回を迎えたコープの森育樹祭が行われたのは9月10日。道中は晴れていたのに、到着して「さあ！始めよう」という時に蒼天を割っての豪雨に見舞われてしまいました。ビニールシートでなんとかその場をしのぐと入れ替わったのはまた眩しい秋の空。

予定を入れ替えて、今回はたくさん生えているオオイタドリの茎を斜めに切り落として吹いて鳴らす「イタドリ笛」をみんなで作りました。切り落とす吹き口の角度、それから吹き方もちょっと難しくて、きれいな音が出た人も出なかった人も。それでもみんなでFの森で合奏すると、それぞれ個性あふれる音色が森じゅうに響き渡ったのでした。

森の除草ももちろんやりましたよ。1時間足らずの間に3つの大きな草の山が積まれ、植樹した木々はすっきり日が当たるようになりました。これからもFの森の生長をみなさんで見守っていきましょう。

第8回 北海道の森づくり交流会

あんな森づくりも、こんな森づくりも、北海道の多様な“森づくり”を広げよう！

今回は基調講演にNPO法人苫東環境コモンズの草苅 健さんをお招きしました。苫東の森は長らく放置されていましたが、草苅さんが人海戦術で森づくりを進めてきました。間伐した木は薪に割りますが、薪づくりというのは老若男女、障がい者や心の病がある人でも関わることができるので、どんな人でも森に居場所ができるし、薪の需要とつながることができれば里山づくりがスモールビジネスになる、という、これからの森づくりについてお話いただきました。お昼を挟んで午後にも、参加者のみなさんが交流し、新しい森づくりのつながりを紡ぎました。北海道の森づくりのこれからが、どんどん繋がって広く大きく北海道の未来の森を包みますように。

あすもり10周年の新企画！

親子でもりもりWeek

食育、木育、みんなで子育て楽しもう！

今年からの新企画は、木育や食育をからめて地域で見守り子育てしよう！ と、全道9カ所のトドックステーションで1月29日から2月3日まで行われました。

会場では木の砂場や積み木などの木のおもちゃや布の絵本でみんなで思い切り遊んだり、お箸やカスタネットを作ったりと、木に触れ、感じるひとときを過ごしました。トドックステーションは使いやすくてよく利用するというお母さん、「木が好きで食器やおもちゃは木のものが多いです。今回は木のベビースプーンを作りたくて来ました」と、もりもりWeekを楽しんでいる様子でした。

木育マイスター齊藤香里さんによるベビースプーンづくり（上）。ふきのとう文庫の布の絵本に子どもたちも夢中（左）。

Event Report

森づくりは人づくり

円山動物園で環境教育

どんぐりプロジェクト

秋の気配もすっかり深くなったこの日は心配されていたお天気にも恵まれて絶好の行楽日和となりました。今回は、円山動物園のどんぐりを拾うこともちろんですが、1年前のどんぐりプロジェクトで植えたどんぐりの成長を確認するのも楽しみです。

子どもたちは園内に生えるミズナラの下を、どんぐりを探しながら進みます。途中でエゾリスを観察しながら、飼育員さんにエゾリスが木の種を森に播いて、森を育てているという秘密を聞いたり、エゾシカに拾ったどんぐりを食べてもらって、森が支える命の多さに驚いたりしました。でも、肝心のどんぐりは昨年のようにたくさん見つからず、どんぐりも豊作と不作があることを知りました。

でも、苗床では昨年植えたどんぐりから元気な芽が育っているのを確認。この木も森の生き物たちの命をささえる大木に育つのだなあ。来年になったらどのくらい大きくなっているのか楽しみですね。

円山動物園 de 100人植樹！

9/24 あすもり10周年企画

泥だらけも楽しい植樹！

「どんぐりプロジェクト」と同じ日の午後、今度は親子100人での植樹イベントが同じく円山動物園の中で行われました。晴天の午後、世界のクマ館前に集まった100人。地ごしらえした植樹ゾーンは前夜の雨で田んぼのようにドロドロに。そんな中ですが、参加してくれたみなさんは木の赤ちゃんを丁寧に植えてくれました。足元は泥だらけだけど、最後に受け取った記念品と一緒にいい思い出になったかな？ きっとここにも、みなさんの思いの詰まった森が育っていきます。また植えた木に会いにきてくださいね。

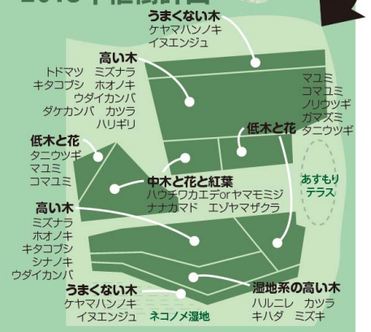
Fの森 ワークショップ 2017

Since 2013

今年度のWSは、例年より1回少ない3回の実施となりましたが、6年続けてくると最初の年からFの森の様子もずいぶん変わってきたことに気づくことができました。復元していく自然と、そこに木を植えて森にする私たちの働きは、見方によっては相容れない部分がありますが、元の自然環境に手を加えた人間の責任として、より良い森を目指して進んでいきましょう。

ということで2018年もユニークな植林計画ができました。次回は10のエリアで植える木が違います。「うまくない木」なんて、どんな森になるのか楽しみですね。次の植樹祭も、みなさんの参加をお待ちしています。

2018年植樹計画



Sponsors

2017年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様

コープ未来の森づくり基金は、下記の企業・団体の皆様をはじめとする多くの方々に支えられて運営しています。

ANAフーズ㈱
ＪＡふらの
ＫＫ企画㈱
UCC上島珈琲㈱
ＵＨＡ味覚糖㈱
アサヒビール㈱
アサヒ飲料㈱
アヲハタ㈱
イーパック㈱
イチビキ㈱
イトウ製菓㈱
エースコック㈱
エスビー食品㈱
オハヨー乳業㈱
カゴメ㈱
カタギ食品㈱
カネシメ食品㈱
カネ増製菓㈱
カバヤ食品㈱
かも川手延素麺㈱
カルビー㈱
カンロ㈱
キーコーヒー㈱
キユーピー㈱
キリンビバレッジ㈱
クラシエフーズ販売㈱
ケンミン食品㈱
サッポロウエシマコーヒー㈱
サッポロビール㈱
サラヤ㈱
サンスター㈱
サントリービバレッジサービス㈱
サントリーフーズ㈱
サンマルコ食品
シーズイシハラ㈱
ジャパンフリトレー㈱
チョーヤ梅酒㈱
テーブルマーク㈱
ネスレ日本㈱
ハインツ日本㈱
ハウス食品㈱
はごろもフーズ㈱
ハナマルキ㈱
ひかり味噌㈱
フジッコ㈱
フジフレッシュフーズ㈱
フタバ食品㈱
フルタ製菓㈱
ブルドックソース㈱
ホクト㈱
ホクレン農業協同組合連合会
ポッカサッポロフード&ビバレッジ㈱
マルカワ食品㈱
マルコメ㈱
マルダイ味噌販売㈱
マルトモ㈱
マルハニチロ㈱
ミツイシ㈱
モンデリーズ・ジャパン㈱
やまう㈱
ヤマキ㈱
ヤマサ醤油㈱
ユウキ食品㈱
ユニチャーム㈱
ライオン㈱
伊藤食品㈱
一正蒲鉾㈱
越後製菓㈱
王子ネピア㈱
加藤産業㈱
㈱J-オイルミルズ
㈱Mizkan
㈱Mizkan Holdings
㈱エルビー
㈱カクサ
㈱カネカシーフーズ
㈱ケイアイフーズ
㈱ケータック・プランナーズ
㈱シー・ファーム
㈱ジェーシー・コムサ
㈱シゼン・食品
㈱ソラチ
㈱タカキベーカリー
㈱トキワ
㈱ニチレイ
㈱ニッキーフーズ
㈱ビックルスコーポレーション札幌
㈱ブルボン
㈱ポールスタア
㈱ホクリョウ
㈱ホッカン
㈱マルエス
㈱マルナカ
㈱マルヤナギ小倉屋
㈱みすずコーポレーション
㈱ヤクルト本社
㈱ヤヨイサンフーズ
㈱わかさや本舗
㈱伊藤園
㈱宇治園
㈱永谷園
㈱加藤美蜂園本舗
㈱丸三北栄商会
㈱菊田食品
㈱金市商店
㈱湖池屋
㈱幸田商店
㈱江戸屋
㈱札幌バリ
㈱七尾製菓
㈱小山製麩所
㈱小山本家酒造
㈱小川生薬
㈱小林つくだ煮
㈱新進
㈱浅利佐助商店
㈱大潟村あきたこまち生産者協会
㈱桃屋
㈱梅のひさぎ
㈱白子
㈱八葉水産
㈱不二家
㈱富士商会
㈱宝幸
㈱北海道日水
㈱堀川北海道事業部
㈱明治
丸美屋食品工業㈱
岩下食品㈱
岩塚製菓㈱
岩田醸造㈱
金印物産㈱
公財）塩事業センター
江口製菓㈱
江崎グリコ㈱
合同酒精㈱
国分北海道㈱
佐藤食品工業㈱
佐藤製薬㈱
札幌酒精工業㈱
三井農林㈱
三幸製菓㈱
三桃食品㈱
三桃食品㈱東北工場
三本コーヒー㈱
山下食品㈱
山崎製パン㈱札幌工場
歯舞漁業協同組合
小西酒造㈱
上北農産加工㈱
森永㈱
森永製菓㈱
森永乳業㈱
森永乳業北海道㈱
星野物産㈱
盛田㈱
石光商事㈱
赤城乳業㈱
雪印メグミルク㈱
大塚食品㈱
大塚製薬㈱
沢の鶴㈱
竹山食品工業㈱
東海漬物㈱北海道営業所
東洋水産㈱
内堀醸造㈱
日進製菓㈱
日清シスコ㈱
日仏貿易㈱
日本ケロッグ（同）
日本ハム北海道販売㈱
日本ハム冷凍食品㈱
日本ルナ㈱
日本食研㈱
日本水産㈱
日本生活協同組合連合会
日本製粉㈱
日糧製パン㈱
富士物産㈱
伏見蒲鉾㈱
福山醸造㈱
片岡物産㈱
北海道キリンビバレッジ㈱
北海道コカ・コーラボトリング㈱
北海道サンジェルマン㈱
北海道漁業協同組合連合会
北海道味の素㈱
北見鈴木製菓㈱
北日本フード㈱
有楽製菓㈱
㈲みやけ食品
㈲大丸本舗
㈲中田食品
理研ビタミン㈱

（順不同）

協賛企業に聞いてみた。

応援しています コープの森づくり #13

シーズイシハラ株式会社

http://www.cs-jp.net/

シーズイシハラ株式会社は、古紙などのリサイクル事業と、ペットシーツなどペット用品の製造・販売事業をしている会社です。

もともとリサイクル業をしていたこともあり、リサイクル資源を活用してペットシーツを作っていました。「環境シーツ」という商品で、トドックの宅配で扱われています。ただ、時代背景とともに供給が難しくなり、現在はリサイクル資源を使っておりません。でも、何か環境保全の役に立てないかと考え、「環境シーツ」の売り上げの一部をあすもりに協賛し、森づくりの支援をすることになりました。

会社には、環境に与える影響を最小限にして地球環境の保全に重点的に取り組んでいくという指針があって、他にも廃棄される商品を削減するなどの取り組みを行っています。これからも、地球のために私たちができることを進めていきたいと思っています。

話してくれたひと
シーズイシハラ株式会社 営業本部
藤原 裕介さん

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.15」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。

Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？ 右から3つずつお選び下さい。

巻頭コラム（P2）
森と川で育て。子どもたち（P3～7）
木づかい（P8） 大きな木の小さな物語（P9）
森のキモイ！キレイ？（P10,11）
木育エッセイ（P12）
コープの森づくり（P13～15）

Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？（はい・いいえ）

Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。

Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

PRESENT！

アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「おもちゃの森sapporo*」からどんぐりのおもちゃをプレゼント。スロープを転がすとコトコト歩くかわいい姿に癒されます。

※スロープは別途購入することもできます。
詳しくは「おもちゃの森sapporo*」のサイトを。

応募方法

アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。
プレゼントの当選は発送をもって替えさせて頂きます。

応募締切 5/31(木) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX：011-671-5743
メール：csapmori@todock.jp

携帯メールはこちらからどうぞ